



「自分の世界を広げる」ということについて

校長 岩崎 撰也

このところ、道内では6日間連続で感染者が1,000人を超えるなど、収束の方向に進むかと思われたコロナ感染が急速な勢いで増加しています。BA5を中心とした第7波は最大級の感染者数が予想されており、これから夏休みを迎え、人の動きが活発になる中で今まで以上に警戒心を持って過ごすことが必要だと思えます。

さて、学校では今月お二人の方に外部講師として生徒たちに講話をしていただきました。まず、7/12(火)にはJICAのボランティア活動に参加していた宮長さんがブラジルやグアテマラでの暮らしについてお話をしてくださいました。予想通り治安は悪く、スリなども多いので自分の身は自分で守ることが必要であること、時間にルーズなところが現地での「普通」の感覚であることなど、日本と大きく違う慣習を知ることができました。またグアテマラの人々と接していて、家族や友人への感謝とか愛情など気持ちの伝え方がストレートで、知らない人にも優しく、明るく接する人が多いという印象を持ったそうです。最後に生徒たちに「英語を頑張って挑戦してほしい、片言の英語でも伝える意思があればどうにかなる。自分は使わなければ生きていけない環境にいたから必死に頑張った。みんなも今からでも力をつけてほしい。」というメッセージを伝えてくれました。



そして、7/14(木)には釧路高専の小田島先生が「朗読」の仕方について講義をしてくださいました。山川方夫の「他人の夏」という作品を生徒たち全員が分割して朗読するという形で講義が進みましたが、最初生徒たちには「こんな細かいことまで意識して読むの?」というような戸惑いがあったと思います。朗読が進むにつれてだんだん先生の「意図」が理解されていったように感じました。朗読をする際に、人にはどのように聞こえるのか、どのように読めば作者が伝えたかった思いや場の空気をリアルに表現できるのか、そのことを伝えるためにあえて「細かいダメだし」をしていたのです。いろいろな教科の授業で生徒たちは「読むこと」には慣れていますがここまで自分の読み方を意識したことはなかったと思います。「自分の伝えることを人はどのように受け取るのか」この意識を持って話し方や伝え方を工夫する習慣は生徒たちが社会人になったとき、例えば企画のプレゼンテーションをする場面などで、自分自身の大きな武器になると思います。



双方ともに生徒たちにとって、自分の世界を広げることができたお話や体験だったと思います。お忙しい中、講師を務めていただいたお二人の先生に心より感謝申し上げます。学校では本日で1学期が終わり、明日から26日間の夏季休業に入ります。せっかくのお休みですので、生徒の皆さんには学期中にはできない、自分の世界を広げるような体験をしてほしいと思います。そして8/18日の2学期始業式には少し成長した、元気な姿の皆さんと再び会えることを楽しみにしています。